

日本出土の中国産青磁の動向

—龍泉窯系青磁を中心に—

徳 留 大 輔[※]

1 はじめに

これまでに日本で出土している青磁は主に越州窯系、龍泉窯系、景德鎮窯（図1）が知られ、その他にそれらと比べると数はだいぶ少ないが耀州窯などの製品が知られる。特に前三者はいずれも所謂貿易陶磁器としても重要な役割を果たし、日本をはじめとする、東アジア、東南アジア、西アジアまでもたらされており、その動向を整理することは、当時の貿易の形態や流通経路、さらにはその背後にある社会・文化的関係を考察する上で重要な役割を果たすことになり、これまでに先学により指摘されてきたことである。

拙稿は、今後、平泉における中国陶磁の流通や産地に関する

研究を相対的に位置づけるための一助とするため、龍泉窯系青磁が中心となるが、日本出土の中国産青磁の動向を大まかにではあるが整理することを目的とする。

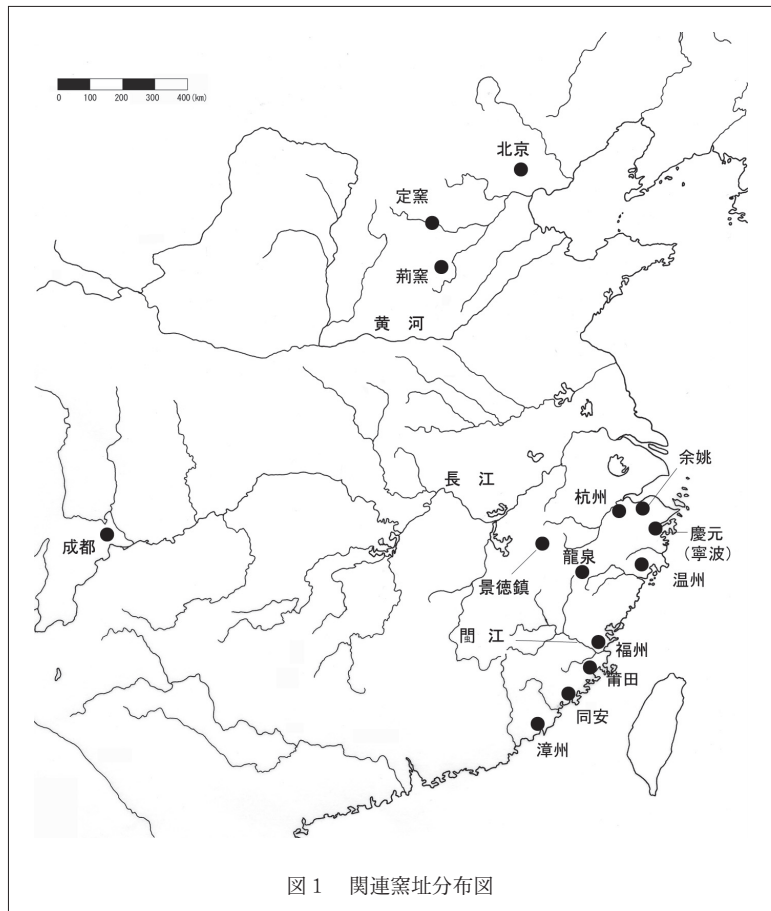


図1 関連窯址分布図

2 日本で出土（伝世）する中国産青磁の流れ

2-1 初期貿易陶磁段階の青磁：越州窯系青磁を中心とする時代

これまでの研究の成果から日本における貿易陶磁の継続的な流入段階は8世紀末頃からと考えられており、越州窯系の青磁（図2）、唐様式（荊州窯系および広東潮州窯や福建産などの華南産）の

※山口県立萩美術館



図2 越州窯上林湖窯（左：龍窯址、右上：窯址周辺に散布している青磁）筆者撮影

図3 福州懷安窯出土品（南朝～五代）・6～10世紀（海のシルクロードの出発点福建展図録より転載）

白磁、長沙窯産の黄釉陶器が日本を始め、東南アジアにも広く流通しており、この時代は主に初期貿易陶磁の時代（亀井 1986）として理解されⁱ⁾、おおよそ 11 世紀中頃がその下限ということになる。

この段階に中国産青磁が出土する遺跡は、当時の都である平安京、大陸への玄関口である鴻臚館、大宰府、さらには地方官衙、寺院遺跡などが中心であるが、より良質な製品は京都に、そして粗製品は地方にという傾向があるようである。器種はほとんどが碗で、その他、水注、壺、壺唾、香炉、托、合子などが見られる。粗製の青磁碗については、産地の違いが想定されてきたが、博多遺跡群の調査に長年携わり、また福建地域の調査を行われてきた田中克子氏（1999）らの研究の中で、この段階の粗製の倣越州窯青磁が福州・懷安窯の製品であることが明らかにされ、さらに北部九州では懷安窯産の青磁（図 3）が越州窯産よりも大量に出土していることが指摘されたⁱⁱ⁾。大陸に近い北部九州では、他の地域と比べると、比較的広範な階層まで、越州窯、倣越州窯青磁が広がっていたことになる。

その後、11 世紀代は青磁の輸入は低調になるが、決して中国陶磁が流通していなかったのではな

i) なお、これより以前にも中国産青磁は日本にも舶来している。その代表的な作例が法隆寺献納宝物（現・東京国立博物館保管）の中にある一点の青磁四耳壺である。このタイプの生産地は浙江省、福建省あるいはその周辺の地域と考えられてきたが（長谷部・今井 1995）、近年、森達也氏は造形性、胎や釉調、肩部の耳の特徴が福建の泉州の唐代の墓地で出土する盤口壺に同様の特徴が多いことから、主に福建産の可能性を指摘している。

ii) 一方で、2012 年 12 月に筑紫野市堀池遺跡から上質の越州窯青磁の唾壺が検出された。報道によると、方形と円形の二重の周溝で囲まれ、木炭で木棺を覆った「木炭柳木棺墓」（9 世紀中ごろ～後半）の遺構出土であり、当時の大宰府政庁の地元の高級官僚の墓の可能性が指摘されている。これまで越州窯の唾壺は京都でのみ出土例が確認されていたのみであり、地方であっても高級官僚には上質の中国陶磁を所持することが許可された可能性がある。

く、11 世紀後半～12 世紀前半には、福建閩江下流域の閩清義窯（田中 2003）ⁱⁱⁱ⁾、広東（潮州窯、西村窯など）産の華南白磁を主に、また景德鎮窯系青白磁も流通している。そのほか、閩江上流域の建窯産系の天目碗、同じ閩江流域で日本では茶入として重宝された洪塘窯の褐釉壺なども流入している。なお平泉においてもこの時期、福建産を中心とする華南産の白磁が見られるが、上述の流れの中に位置づけられるものと思われる。

2-2 龍泉窯系青磁を中心とする時代（図 4）

唐から五代にかけての青磁の一大産地であった越州窯が衰退し、代わりに越州窯青磁の影響を受けながら同じく浙江の龍泉の地において独自の展開があった。12 世紀前半～中葉にかけて、龍泉窯系青磁は青みを帯びる緑色の釉色を呈するようになり、数は少ないもののこれらの青磁の碗、碟が日本へ輸入されている。所謂、初期龍泉窯青磁（或いは龍泉・同安窯 0 類とも称される）とされる胴部が広く、外面には片切り彫りの線条文、内面には櫛描文と点綴文が表された製品である。そして 12 世紀後半中葉に龍泉窯系青磁は国内の流通量が増加する。龍泉窯系青磁は凡そ 16 世紀まで継続して日本へ流入している。この間、流通する龍泉窯系青磁の特徴も変化する。以下に段階ごとに、その動向を整理していく。

2-2-1：劃花文を中心とする段階

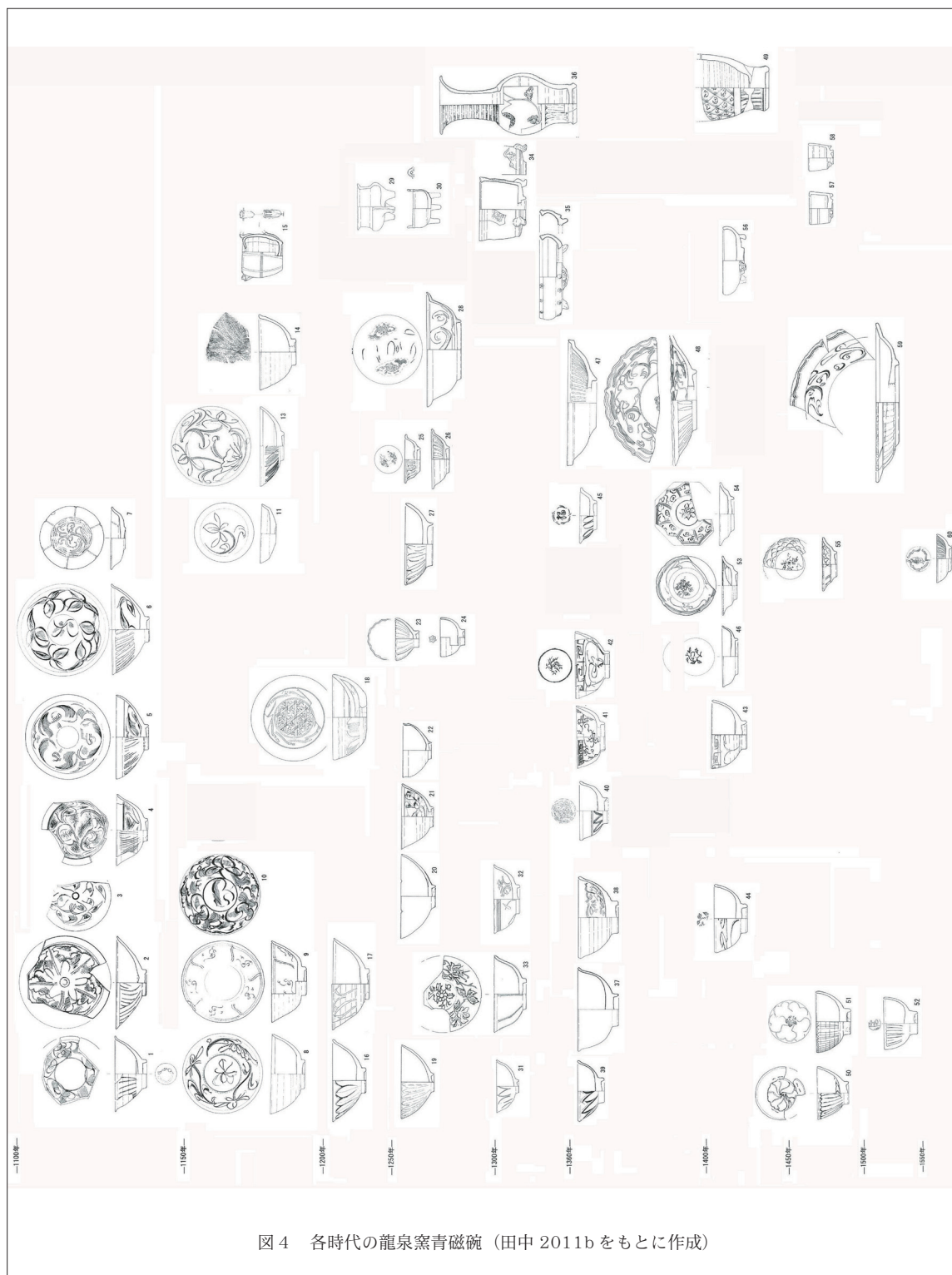
先述したように 12 世紀の中頃までに生産されるタイプは外面は片切り彫りで線条文を表す特徴をもつが（所謂、龍泉窯・同安窯碗 0 類）、12 世紀中葉～末頃にかけて龍泉窯系の青磁の劃花文碗、碟が大量に輸入され、流通している。先述したように当該期の龍泉窯系青磁は青みを帯びる緑色の釉色が特徴である。碗は内面に片切り彫りで蓮花文や飛雲文などが流麗に表されたものが多い（所謂龍泉窯青磁碗 I 類）。12 世紀中葉から後半にかけては、外面は無文のものも多い。また皿類は胴部中ほどで屈曲し、見込みに肩切り彫りで文様が表されるものが多い（亀井 1992）。さらに、龍泉あるいは浙江省と福建省の境界域に近い、福建北部の松溪、さらには福建の閩江流域、さらにはより以南の沿岸部地域、南平、福清^{iv)}、莆田、南安、同安などの地においても、篋や櫛を用いて内面に簡略な文様を彫った碗・皿類が作られ、碗は外面にも櫛目文がある^{v)}（亀井 1995）。これは先述した所謂初期龍泉窯青磁のタイプを祖形とするのであるが、釉は酸化焰焼成により黄色味を呈しており、碗の外面下半、皿の底部は施釉されない、所謂「同安窯系」「珠光青磁」と称されてきた一群がある。

この青磁刻花文流入、広がりに関しては、太宰府や博多では 12 世紀前半段階から見られるようになり（例えば博多遺跡群 139 次 SE0016、博多駅・築港線第 1 次調査 SE39 など）、また同安窯系

iii) 田中氏が指摘するように、この時期、福建の各地で玉縁口縁の碗が焼造されている。閩清義窯の各地点でも若干の時期差が存在しながら、かなり広い地点でそれらが焼造されている。

iv) 福清石坑窯は閩江下流の福州よりも南、莆田窯に近いところに所在する。所謂同安窯産の青磁については、近年では同安窯ではなく莆田窯、南安窯で生産されたものが日本へ輸出されている可能性が指摘されている（亀井 1995）。筆者は近年、福建地域の窯址を踏査する中で、さらにその候補地の一つとして福清窯の重要性についても指摘しておきたい。福清窯では誇張的に表現された天目碗を大量に生産している窯であり、日本でも博多遺跡などで数多く見られる。この福清窯では青磁もほぼ同時期に焼造されている。青磁は莆田窯の南宋時代の青磁と比較すると刻花がやや丁寧な感じがあり、やはり博多を始めとする日本で見られる同安窯系の櫛描文青磁（石坑窯では I 類、II 類が主体。III 類は確認できなかった）とも共通点がある（徳留等 2012）。黒釉碗と一緒に海外貿易用の製品として焼造され日本にも入っていたことが想定され、これらの窯土士の技術的特長などを含めたさらなる研究が今後期待される。

v) 龍泉窯青磁を模倣して生産することについて、浙江、江西、福建における宋元時代の窯詰技法などを見ると、龍泉窯からの地理的距離、龍泉窯青磁の流通の度合いに応じて、技術導入に直接的、間接的な違いがある可能性が想定される（徳留 2012）。



青磁Ⅰ類も12世紀の中頃を過ぎると非常に数多く流入している。ところで水澤幸一氏（2009）の指摘にもあるが、京都では平安京Ⅳ期新段階（1170年頃）の遺構とされるSD222・225では白磁の出土する数量が青磁のそれよりも極めて多い状況が確認されている。全体として12世紀後半期には刻花文の碗が多く見られることから、龍泉窯系青磁の本格的な広がりとは12世紀第4四半期頃とさ

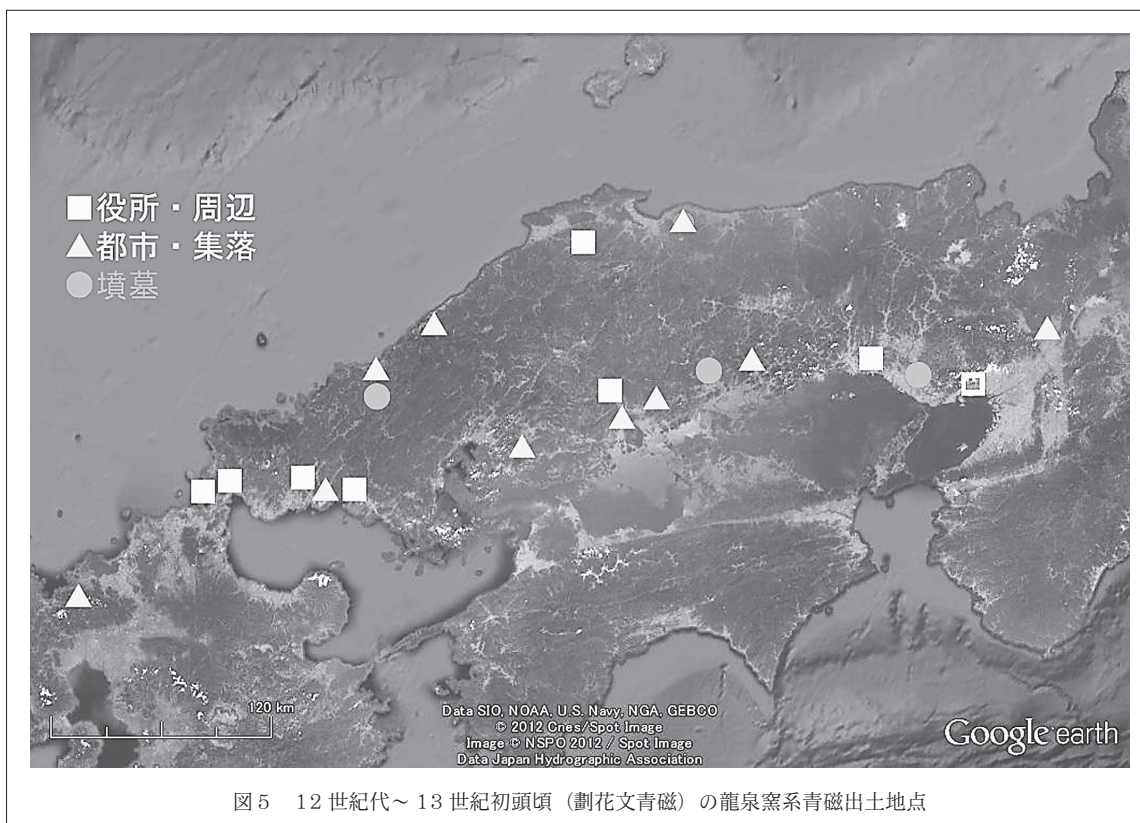


図5 12世紀代～13世紀初頭頃（劃花文青磁）の龍泉窯系青磁出土地点

れるが^{vi)}、一方で、鎌倉では12世紀後半（水澤 2009）にかけて、平泉では12世紀第3四半期には同タイプの碗類が見られることから（八重樫 1996）、全体としては12世紀第3四半期頃には白磁から青磁へとその流行が徐々に移行しはじめていたことになる。

なお博多へ積み上げられた青磁がその後、瀬戸内ルートさらには日本海ルートを利用しながら京都へ入っていることが、中国地方における龍泉窯青磁の出土状況が物語っている。これは青磁だけでなく、博多からの白磁の搬入ルート（水澤 2009）や高麗青磁の分布から考えられる流通ルート（降矢 2002）と同様の様相を呈している。つまり、この段階の龍泉窯系青磁は基本的には青磁が広がる前段階（11世紀後半）に成立していた既存の交易ルートに沿って各地へ広がっていたものと理解される（図5）。

2-2-2：蓮弁文碗および上質タイプ（砧青磁）の流入段階

13世紀前後から前半頃にかけて、外面に蓮弁文を表した碗類が大量に輸入される。本場の中国・龍泉窯では12世紀末から13世紀初頭頃の南宋時代中期に、その青磁の技術・意匠が大きく発展する時期の製品である。龍泉窯は南宋官窯の影響を受けて、薄い胎土の上に厚い釉薬をかける、所謂薄胎厚釉の粉青色の青磁が作り出され、青銅礼器や金銀器、ガラス器の形態を模倣した新しい器形も登場している（森 2000）。これらの上質な青磁は日本では砧青磁と称されてきたが、一部が日本にも伝世し（例えば和泉市久保惣記念美術館が所蔵する国宝・青磁鳳凰耳瓶 銘万声、根津美術館が所蔵する重要文化財 青磁筍形瓶、青磁袴腰香炉など）、広く流通したのは厚胎薄釉で、所謂砧青磁と比

vi) 小山雅人氏（2011）によると京都（宇治市街遺跡SK 54）においても龍泉窯系と区別が極めて困難である、所謂同安窯系青磁碗0類と呼ばれるタイプの出土事例が確認されている。もちろん、それが青磁の流通のピークを表すわけではないが、12世紀前半頃において京都周辺での青磁が流通する最初の頃の状況を考える上では重要な事例といえる。

べるとグレードが落ちる碗・皿（坏）類が中心である。また森本朝子氏（2010）の研究によると、博多遺跡群では13世紀前半は、一般に見られる碗・皿類とは異なる器形の袴腰香炉や筒形香炉、双層碗などが見られる。また13世紀後半になると鎌倉同様に尊形の貼花文の尊形の花瓶などの器形が見られるようになるが、博多は全般的に鎌倉と比較すると大形の製品が少ないことが指摘されている。そして大形の製品は14世紀代に入ると鎌倉を中心に数多く流入することになる。

2-2-3：大形器種の流入段階：天龍寺青磁の流入

14世紀代の元時代には、中国における支配階級のモンゴル人や西アジアの人々の嗜好にかなった大形の器種（花瓶、酒会壺や大盤など）が数多く生産されている。また装飾についても貼花文、刻花文、（日本への流入量は少ないが）鉄斑文などが多用され、釉色は青緑色を呈するようになる。この段階は、中国国内外の龍泉窯青磁の需要を満たすために、龍泉窯青磁が大量に生産され、輸出もされており、西アジアや日本、韓国、東南アジアでも数多く出土例が確認されている。日本では14世紀段階、龍泉窯系青磁と景德鎮産の枢府手の白磁および磁州窯系の白地鉄絵製品などが流入している。その中でも龍泉窯系青磁は、中国に派遣された寺社の造営費用を捻出するための寺社造営料唐船「天龍寺船」の名称にちなんで、天龍寺青磁とも称されている。1323（至治三）年に、慶元（寧波）を博多へむけて出港し、その途中韓国新安沖で沈んだ沈没船も、京都の寺社造営料唐船であった。またその新安沈船の積荷の内、陶磁器では龍泉窯系青磁が、全体の56パーセントを占めていることから、いかに龍泉窯系青磁が当時重宝されていたかが分かる^{vii)}。その荷主は京都や鎌倉の権力者であり、それらの地域で消費されるものと考えられている。博多では13世紀代に見られた碗・盆類はやや質が悪くなり、また外反口縁の碗も見られるようになり、高台まで釉が掛けられていないものが多く見られるようになる。また13世紀代に流行している蓮弁の文様は、時期が下るにつれて幅が狭くなることが指摘されているが（森2000）、14世紀段階にはさらに簡素化が進み、かつ高台径が小さくなり、内面には印花文や刻花文が表される。そのほか特殊な器形としては前の時期と同様に香炉類が見られるほか、鳳凰耳双耳瓶、酒会壺などの大形の製品も見られるが、それらの数はやはり鎌倉と比べるとかなり少ない（田中2008、森本2010）。また新安沈船の龍泉窯青磁は酒会壺、大型の花瓶が圧倒的に少なく、大部分は小型で粗製の碗・皿・鉢などが中心である。龍泉窯青磁の碗・皿類が日本の各地の遺跡で発見されるが、これはこのような日本と中国との貿易の変化と鎌倉時代後半に展開する日本国内の流通の活発化があいまって、中国陶磁をはじめとする唐物が全国的に普及するようになったからである（佐伯2003）。それでもやはり、優品の流通と消費は鎌倉を中心としているのは、この時代の特徴といえる。

2-2-4：大形品の減少と粗製の碗類が主体となる段階：琉球を介した青磁の流入

14世紀後半になると明朝の海禁政策により、貿易形態がそれ以前と大きく異なり、公的には日本と中国との直接の貿易でなく、琉球王朝を介しての貿易が主体となる。琉球王朝では景德鎮や福建産の陶磁器を含む多くの中国陶磁が流入し、その後、日本、朝鮮半島、東南アジアへと運び込む、所謂中継貿易の主体として繁栄している。

たとえば琉球王国の王城であった首里城内にある京の内地区倉庫跡SK01は1459年の火災によ

vii) また報告書の中では「南宋様式」と「元様式」が存在することが指摘されている（国立中央博物館1997）。前者に関して、観察の結果使用痕が確認されることから、所謂アンティーク品としての日本側の需要に応えたものであるという見解がある（森達也2009）。

り廃棄した琉球王室の財産を保管していた倉庫跡と考えられている。この遺構からは一千点を超える中国や日本、ベトナム、タイなどの陶磁器が出土しているが、中でも龍泉窯系青磁は14世紀後半から15世紀前半の製品が中心である。器種は碗、皿類が多数を占める、日本と同様に碗類では端反、内湾タイプが主流である^{viii)}。しかし、明初の酒会壺や水注、大形の盤や鉢などの優品が見られ^{ix)}、このことは同時期の日本では大形の製品が減少していた状況とは異なる。

15世紀第3四半期以降、国内の政治的混乱や貿易商人（博多商人と堺商人）の利権をめぐる混乱が生じた。応仁・文明の乱（1467－1477）後、瀬戸内海の家賊船を回避したことで、堺商人の土佐沖・南九州を通る南海航路が確立していたことが、中世後期を代表する貿易都市として繁栄していた堺環濠都市遺跡における貿易陶磁器の組成・編成にも表れていることが分かっている（續2011）。16世紀段階に入ると龍泉窯における青磁そのものが、徐々に衰退に向うことも知られており、この段階に中国から流入しているのは龍泉窯系の粗製の碗や盤であり、日本で流通する中国産陶磁も景德鎮系の青花や白磁、あるいは華南産の褐釉壺などへと移行している。

2－3 景德鎮の時代：青花と倣龍泉窯青磁

日本における貿易陶磁の様相としては、16世紀代は景德鎮系の青花磁器が主流となる。龍泉窯自体の青磁の生産も質の低下と流通量の減少（特に輸出に関して）が顕著になっている。16世紀後半になるとさらに青花では漳州窯産も増加している。青磁という観点から見ると、それまでの段階と比べて青磁の流入する絶対量が減少する傾向がある。ただしこの段階の青磁は「七官青磁」とも称され、瓶、香炉、合子などは茶人らに好まれ、伝世品も多い。これらは、以前は龍泉窯などでの製品と考えられてきたが、製品の高台畳付にみえる露胎の色や釉色の特徴が、龍泉窯の特徴と異なるものが見られる。むしろ近年、景德鎮窯で発掘された製品の中に、明末頃と思われる製品の中に倣龍泉窯青磁が多く、それらの特徴が七官青磁の特徴と類似することから、明代末に日本側から景德鎮窯へ依頼して生産した製品である可能性も指摘されている^{x)}（森2009）。実際、遺跡出土例を見ると、16世紀後半以降には数はそれほど多くはないが龍泉窯青磁を模倣した景德鎮製の青磁の型押し皿（無文や菊花文）などの出土例も見られるのである。但し、全体的な青磁の歴史という視点で見ると、16世紀段階には日本では龍泉窯青磁の時代は同時代的の製品は減少しており、青花や五彩磁器にその主流が代

viii) 15世紀前半では碗は器の外面の口縁下に雷文帯を施す直口碗タイプ（上田Ⅳ－2類）と無文で口縁部が外反し、内面に印花文を施すタイプ（上田Ⅴ－2類）が多くなる傾向が明らかにされている。また15世紀の中頃にかけては外面の蓮弁文が細身で粗略なもの（上田Ⅱ－3,4類）が主流となる（上田1982,2006）。さらにこの頃は福建の邵武窯系の白磁皿も多く見られる一方で、沖縄では天目碗（茶洋窯で焼造される灰被タイプ）は多く見られるが、全体的に流通する中国産の天目碗の流通量は少ない。

ix) 首里城の二階殿地区出土のものに、三爪の龍文様が刻まれた器などが見られるほか、明初の龍泉官器と思われるような器が数点確認された（2012年3月に沖縄県埋蔵文化財センターにて実見）。また森達也氏（2011）の指摘にあるように、琉球王朝の主要な貿易港である那覇港の渡地村跡からも明初の龍泉官器が出土している。渡地村跡出土の龍泉官器と思われる器種は盤、碗類である。いずれも発見されている龍泉青磁の割合で見ると極めて少量であるが、やはり琉球に入ってきていることが分かる。一方、14世紀後半から15世紀初頭においては今帰仁グスク（第Ⅲ期）においても明国との交易が盛んであり、三足香炉、盤を始め数多くの龍泉窯青磁が見られる。いくつか良質の製品は見られるが、龍泉官器と思われる製品は見られない。明初の龍泉窯の官器を焼造した浙江省大窯洞岩窯跡における製品管理の厳格さや、龍泉官器を輸送する際の拠点であった江蘇省河下遺跡では、龍泉官器の焼造停止とともに不合格品（在庫品）・失敗品を含めて中国国内で一括廃棄された可能性（霍華2011）があることを考えると、沖縄で出土している龍泉官器は洪武から永樂年間といった明初に、生産されたほぼ同時代に琉球に明王朝から下賜されたものと考えられる。

x) 景德鎮窯において、清朝時代に龍泉窯系の青磁を焼造されていたことは、これまでも故宮博物院所蔵品などの存在から明らかであった。特に、康熙、雍正、乾隆帝の時には釉調は青翠如玉（青緑の艶はまるで玉のように美しいという表現）、器形も端正であり、釉色も豆青、冬青色と称されるほど美しいと評価されてきた。

わっている。

しかし、15 世紀以降においても龍泉窯系青磁は、鎌倉武士によって重視された器種（例えば花生、太鼓胴盤、酒会壺、盤）に関しては、武士の正当性を権威付けるための威信財として機能しており（小野 2003）、社会の上位層においては、依然としてそれらの龍泉窯系青磁は重宝されていたことは、陶磁器から社会論を考える上でも極めて重要な事象であると言える。

3 まとめ

日本では多くの中国産陶磁器が出土するが、青磁という視点で言えば、越州窯系、龍泉窯系、景德鎮窯の青磁が数多く流通している。それらは生産地の違いだけでなく、流通は時代的な差異も反映している。そもそも中国産陶磁器の多くは、日本人にとっては先進文化地からの輸入品であり、国産のそれと比較すると、同じ陶磁器であっても貴重なものであったことは間違いない。しかし、各時代、社会の中で同じ中国産陶磁器であっても、例えば青磁であってもあるいは同じ龍泉窯系青磁というカテゴリーであっても、器種間、あるいは同一器種でも精粗の差、あるいはその来歴により位相差が生まれ、それがまた所有する者と他者との様々な関係性を生み出すアイテムとなっていたことになる。

平泉では白磁が青磁よりも主流であり、八重樫忠郎氏（1997）は平泉の価値観の中で白磁の中でも壺が最上位にあると指摘しており、平泉遺跡群の中でも柳之御所遺跡の白磁の優越が認められるとしている。その後の鎌倉以降の龍泉窯系青磁の受容と展開とは大きく異なることは、これまでも先学により指摘されているところである。今回は、筆者の力量不足により日本全体における龍泉窯系青磁の動向を大まかに概観したに過ぎない。平泉の白磁の社会の中にどのような龍泉窯系青磁が受容され、位置づけられたのかについて、研究動向・問題の所在を整理し、今後検討を加えたいと思う。

参考文献

- 上田秀夫 1982 「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2、日本貿易陶磁研究会、55 - 70 頁
- 上田秀夫 2006 「龍泉東区 BY24 出土青磁碗と日本出土の龍泉窯系青磁碗」『前近代の東アジア海域における唐物と南蛮物の交易とその意義』国立歴史民俗博物館、11 - 20 頁
- 海のシルクロードの出発点“福建”展開催実行委員会編 2008『海のシルクロードの出発点“福建”－沈没船、貿易都市、陶磁器、茶文化－』海のシルクロードの出発点“福建”展開催実行委員会
- 小野正敏 2003 「威信財としての貿易陶磁と場」『戦国時代の考古学』高志書院、東京、553 - 564 頁
- 霍華 2011 「江蘇省淮安市楚州区河下遺址龍泉窯瓷片堆積坑」『龍泉窯研究』故宮出版社、北京、323 - 340 頁
- 亀井明德 1992 「草創期龍泉窯青磁の映像」『東洋陶磁』第 19 号、東洋陶磁学会、5 - 28 頁
- 亀井明德 1992 「龍泉窯青磁創焼時期への接近」『貿易陶磁研究』No.12、日本貿易陶磁研究会、5 - 27 頁
- 亀井明德 1995 『福建省古窯跡出土陶磁器の研究』都北出版株式会社
- 国立中央博物館 1997 『新安海底文物』韓国文化財管理局、ソウル
- 小山雅人 2011 「京都府出土の同安窯系青磁碗」『京都府埋蔵文化財情報』第 114 号、13 - 19 頁
- 水澤幸一 2009 『日本海流通の考古学 中世武士団の消費生活』高志書院、東京
- 田中克子・栗建安・鄭国珍 1999 「福州懷安窯貿易陶磁研究」『博多研究会誌』7、博多研究会、137 - 204 頁
- 田中克子 2003 「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その二）」『博多研究会誌』10、博多研究会、33 - 55 頁
- 田中克子 2008 「貿易陶磁器の推移 中国陶磁器」『中世都市・博多を掘る』、112 - 128 頁、海鳥社、福岡

- 田中克子 2011 a 「博多遺跡群出土の中国陶磁器と対外貿易」『博多研究会誌 20 周年記念特別号』博多研究会、57 - 78 頁
- 田中克子 2011 b 「龍泉窯系青磁－博多遺跡群出土品から見た時期別変遷」『Make Jade out of clay Longquan Celadon』（原文は韓国語）、釜山博物館、57 - 78 頁
- 續伸一郎 2011 「堺環濠都市遺跡から出土した中国製陶磁器の様相について」『博多研究会誌 20 周年記念特別号』博多研究会、3 - 12 頁
- 徳留大輔 2012 「中国国内の龍泉窯青磁インパクト－福建地域の動向から」『日本人の愛した中国陶磁 龍泉窯青磁展』龍泉窯青磁展開催実行委員会、152 - 161 頁
- 長谷部学爾・今井敦 1995 『日本出土の中国陶磁』中国の陶磁 12、平凡社、東京
- 森達也 2000 「宋・元代龍泉窯青磁の編年研究」『東洋陶磁』第 29 号、東洋陶磁学会、4 - 7 頁
- 森達也 2009 「日本出土の龍泉窯青瓷」『故宮文物月刊』No. 311、国立故宮博物院、20 - 27 頁
- 森達也 2012 「龍泉窯青磁の展開」『日本人の愛した中国陶磁 龍泉窯青磁展』龍泉窯青磁展開催実行委員会、20 - 27 頁
- 森達也・徳留大輔・長久智子・横山志野編 2011 『日本人の愛した中国陶磁 龍泉窯青磁展』龍泉窯青磁展開催実行委員会
- 森村健一 2005 「14・15 世紀の龍泉窯系青磁碗－編年と堺貿易システム－」『産業・社会・人間』No. 6、43 - 54 頁
- 森本朝子 2010 「博多と鎌倉出土の龍泉窯青磁－12 世紀後半～14 世紀前半の特殊器形の探索」『南宋の青磁』根津美術館、131 - 136 頁
- 八重樫忠郎 1997 「輸入陶磁器からみた平泉－分布傾向からの考察－」『貿易陶磁研究集会平泉大会資料 集 東北の貿易陶磁』日本貿易陶磁研究会
- 山本信夫・狭川真一 1984 「大宰府条坊跡Ⅲ」『大宰府の文化財 第 8 集』太宰府市教育委員会
- 山本信夫 2010 「貿易陶磁の分類・編年研究の現状と課題」『貿易陶磁研究』No. 30、日本貿易陶磁研究会、56 - 81 頁
- 降矢哲男 2002 「平泉出土の貿易陶磁 -- 柳之御所跡出土の韓半島産陶磁器から見える流通経路」『平泉文化研究年報』2 号、15 - 26 頁、岩手県教育委員会